

「雨ニモマケズ」考

——宮澤賢治における病いと信仰

黒澤 勉

賢治は常時、小さな懐中手帳と細紐で首からつるした鉛筆を身につけ、山野を跋渉しながら浮かびあがる想念をメモし、帰宅後、机上で、原稿用紙に向かって書いたといわれている。従って賢治作品の最初の姿は、（それがすべてではないにしても）歩きながら機関銃のようなスピードで書いたといわれる、その手帳の中にある。『新校本宮澤賢治全集』には、全十五種類の手帳が収録されているが、その中であって「雨ニモマケズ手帳」は他の手帳と比較にならない重要な意味をもっている。この手帳には、病床の思索と信仰、その生涯の重要な出来事がまざまざと表現されているからである。賢治の文学、生涯を解く一つの鍵は、その熱烈な法華経信仰にあるといわれるが、この手帳ほどにも、それが端的に伺われる「作品」（人に見せることを意識していなかったにもかかわらず、その精神の深さにおいてまさに「作品」である）はない。一つには、これが手帳という他人に見せることを全く意図しない、内面の正直な記録であったためである。また今一つは、死や病いの意識が賢治を深い内省に向かわせたからである。一般的にいつて、病いや死の意識は宗教への契機となることが多いが、浄土真宗の熱心な信仰をもつ家に生まれ、中学時代にはすでに自覚的に真宗の信仰をもち、十八歳で法華経に出会って身震いするほどの感激を覚え、以後も熱烈な求道精神に生きてきた賢治にとって、法華経信仰は、その病床にあって一層重要な問題となった。

これまで「雨ニモマケズ手帳」などと書いてきたが、もちろん賢治自らが「雨ニモマケズ手帳」などと命名したわけではなく、この手帳の中に記された「雨ニモマケズ」の詩が多くの人に深い感銘を与え、人口に膾炙したところから、この手帳を一般に「雨ニモマケズ手帳」と呼ぶようになったものである。現在、その複製本も出版されてお

り、私達はこれを手にとって、賢治の心の内奥の秘密を推しはかることができる。

二

手帳は賢治の死（昭和八年九月二十一日）後、間もないころ、弟の清六が生前、兄の使っていたトランクの蓋裏のポケットから発見したものである。その後、（おそらく蓋裏に密着して気づかなかったのであろう）何かの機会に、さらにそのトランクの蓋裏からハترون紙の粗末な封筒が二通出てきた。一つは表書に「父上様」「母上様」と併記され、その中の二通の便箋には、次のように記されていた。

「この一生の間どこのどんな子供も受けないような厚いご恩をいただきながら、いつも我慢（注、次の遺書に正しく書かれているが、「我儘」と書こうとしたのであろう）でお心に背きたうたうこんなことになりました。今生で万分の一もついにお返しできませんでしたが恩はきつと次の生又その次の生でご報じたいとそれのみを念願いたします。どうかご信仰といふのではなくてもお題目で私をお呼びだしくください。そのお題目で絶えずおわび申しあげお答へいたします

九月二十一日

賢治

今一通は清六、しげ（妹）、主計（くにの夫で、宮澤家に入籍していた）、くに（妹）、に宛てて、次のように記されていた。

「たうたう一生何ひとつお役に立たずご心配ご迷惑ばかり掛けてしまひました。どうかこの我儘者をお赦しくくださ

い。

賢治」

明らかに死を覚悟して書かれた遺書であり、使用された便箋を見ると東京市神田区の旅館八幡館と印刷されている。この遺書は、昭和六年九月、石灰の売り込みのため仙台、東京へと出張した賢治が八幡館で高熱を発し、死を覚悟して書いたものだと示していた。

九月二十一日、この遺書を書いた賢治は、この旅館で床に臥したまま七日間を過ごし、九月二十七日、父に電話して「私はもう終りと思います」と語った。父はすぐに帰郷するように厳命し、親しくしていた日本橋の小林六太郎に電話して至急賢治を帰花させてくれるように頼んだ。この日、小林は寝台車の予約をして上野駅まで賢治を見送った。賢治はこうして二十八日朝、花巻駅に着き、清六に迎えられて家に帰った。賢治が実際に亡くなったのは、奇しくもこの遺書の日付から丸二年後の、昭和八年九月二十一日のことだった。手帳の起点はこの帰花の日に始まっている。

遺書の内容を少し吟味してみよう。この遺書を通して賢治は、両親や、弟妹に対してわがままに生き、家族を心配させてきた自分を許してほしい、と詫びている。又、両親（特に父を意識した言葉であろう）に対しては、「ご信仰」（父は熱心な浄土真宗の信者であり、宮澤家は一族が皆、「南無阿弥陀仏」と唱えていた）を通してでなく、「お題目」（賢治の信じた日蓮宗の教えによれば、「南無妙法蓮華経」と唱えることである。「南無」とは帰依し従う、という意味だから、法華経を信じ、それに帰依し従いますという一種の誓いの言葉である）で自分を呼び出してほしい、と語っている。ここには己が信仰に対するかたくなまでのこだわりがある。両親に宛てた遺書は、一方で両親に対する深い感謝、その両親の意にそぐわなかった親不孝を詫びると同時に、他方では、己れの信仰を主

張するものだった。この遺書は、「家における賢治」——豊かな商人の長男として生まれ、両親の愛に恵まれ、そのことに感謝しつつも、父に逆らい、何とかして父を乗り越えて生きようとあがき続けた賢治の生涯を象徴するものではなからうか。

三

「雨ニモマケズ」の詩を考える場合、賢治がこうした遺書を書いていたということ抜きにしてはその心を十分に理解できない。さらにいうなら、この手帳全体の中で「雨ニモマケズ」をみなければ、十分な把握はできないだろう。特に重要なのは、手帳の第二頁（注、もちろん手帳に頁がうたれているわけではなく、小倉豊文の『雨ニモマケズ手帳』新考』による便宜的なものである。以下、本稿はこの貴重な研究の恩恵をこうむっていることを明らかにしておきたい）の「昭和六年九月二十日 大都郊外ノ煙ニマギレンコトヲネガヒ マタ北上狭野ノ松林ニ朽チ埋レンコトヲオモヒシモ 父母共ニ許サズ 廃はいく軀ニ薬ヲ仰ギ 熱ねつ惱ニアヘギテ唯 是レ父母ノ意わざか僅ニ充タンコトヲ冀こいねがフ」（注、「充タン」は「充タサン」と書こうとしたのであろう。メモ的な記述であるから、このような表記・表現のミス、不十分さは、あちこちに見られる。ルビは読みの便宜を考えて、全て、筆者が施したもの。以下同様である）と判読すると推定される記述（『雨ニモマケズ手帳』新考』による推定）である。端的にいうなら、こういう過去（現実）があつて、雨ニモマケズの願い（理想）があつたということ私達は知らなくてはならない。

第二頁に記されたこのメモは、この手帳の性格を端的に物語るもので、手帳全体の序ともいえるものである。（一頁と三・四頁には、「妙法蓮華経如来神力品」の経文の一部が続く形で記されており、時間的には二頁目のメモを

書いた後に書かれたものだろう、と推定されている)つまり、この第二頁のメモはあらたに手帳の稿を起こそうとした時の、その思いを記した最初のメモだということになる。

日記や手帳を新しく始めようとする時、何がしかの抱負や希望を抱くのは多くの人の経験するところであろうが、この手帳のメモを始める時の賢治にも、深く、新たな思いがあった。それは死ぬはずだった人間がこうして生きている、こうして与えられた貴重な生をどう生きようか、という思いであり、それまでの生き方への反省である。

「大都郊外ノ煙ニマギレントネガヒ」ながらも、それは叶わなかった、と記す賢治の胸に、どのような思いがあったであろうか。「大都」とは、いうまでもなく東京である。賢治が東京で生きたいと願ったことは二度ある。一度は、大正八年、二十三歳の時、東京小石川分院に入院中のトシ看病のため、前年の十二月二十六日から三月三日まで東京で過ごした時。その時、賢治は、父宛の書簡の中で記しているように、東京で人造宝石の製造販売の仕事をしたいと考えていた(注一)が、それは父の了解を得られなかった。

しかし、「大都郊外ノ煙ニマギレントネガヒ」というのは、この願いを指すのではない。ここで指しているのは、賢治二十五歳の年、大正十年一月二十三日、法華経信仰の過熱、そして国柱会への傾倒から突然家出をした時のことであろう。

賢治はこの時、謄写版刷りの小さな出版社に勤めて生活費を稼ぎながら国柱会の奉仕活動をしていた。その中で国柱会の高知尾知耀たかちおと出会い、信仰と文学を結びつける道―信仰に立脚する文学の創作を自らの使命と自覚する決定的な出来事があった。それは手帳(一三五頁)に「高知尾師ノ奨メニヨリ 法華文学ノ創作 名ヲアラハサズ 報ヲウケズ 貢高こうこうノ心ヲ離レ」というメモがあることによっても明らかである。家出をした時に書かれた関徳称宛の書簡にも「さあここで種を蒔きませぬ。もう今ノ仕事(出版、校正、著述)からはどんな目にあってもはなれま

せん」(大正十年一月三十日付)と記されている。信仰のエネルギーを著述という形に生かす道を発見した賢治は、油に火が注がれたように、猛烈な勢いで創作に励み、一月に三千枚書いたというエピソードも伝えられている。

それまで迷いに迷い抜いてやっと探しあてた己が道、東京での自活と創作の道―それが挫折したのは、八月半ば、トシの咯血があり「スグカエレ」の電報を受け取ったことによる。それは父の命というより妹自身の願いであっただろう。賢治の影響で法華経への信仰をもつに至った妹である。信仰とそして、おそらくは結核という病気を共有していた妹の病気を聞き、賢治としては、何をおいても花巻に帰らざるをえなかった。こうして賢治は自らのつかんだ自立の道を生きることに失敗した。手帳の「大都郊外ノ煙ニマギレントネガヒ」は、東京で国柱会の活動をしながら、自ら生活費を得て(父が送金するとそれをそのまま送り返したという)、創作に専念しようとしたその願いが叶わなかった、という挫折体験を指している。

続いて、「マタ北上狭野ノ松林ニ朽チ埋レンコトヲ」とあるのは、花巻農学校の教師を依頼退職して、花巻市下根子桜の別宅に移り、そこで独居自炊の生活をしながら、農民運動を展開した時のことを指している。現在「雨ニモマケズ」の詩碑の建立されている羅須地人協会跡は「松林」の中にある低い岡で、賢治はその崖下の荒地を開墾し畑作を行い、自ら百姓となった。「朽チ埋レンコトヲ」思ったと記す通り、それは命がけのなみなみならぬ決心であった。

しかしこの活動もわずか二年四ヶ月で挫折する。昭和三年(三十二歳)八月、連日の炎天の中を、稲作の指導に奔走した賢治は、疲労困憊のあげくついに倒れ、豊沢町の実家に戻り、病床に臥す身となったのである。花巻病院で両側肺浸潤と診断された。

以上の二つの大きな挫折は、厳密にいえば、両親が「許サズ」といえるものではない。許すも許さないも、いず

れも賢治自らが「勝手に」決行した「家出」であり、東京での自立の道が挫折したのは妹の病気のためであり、花巻での自立の道が挫折したのは自らの病気によって挫折したのである。

両親は東京での賢治の行動についても、また花巻における農民活動についても決して賛成ではなかった。いや賛成でないどころか、理解しがたい行動として強く反対していた。賢治はそれを、わかり過ぎるくらいわかっていた。病いに倒れた賢治の意識の中には、両親の意に背いたことが病いの原因だという辛い反省もあつたようである。「共ニ許サズ」という言葉の中には、両親に許されなかつたと恨むのではなく、両親の意に背いて生きて来たことに対する深い謝罪の念がある。

自らの夢に破れた賢治は、今や何をなさうにも健康を失った無力な者として「廢軀ニ葉ヲ仰ギ熱惱ニアヘギテ唯是レ父母ノ意僅ニ充タンコトヲ」「冀フ」しかなかつたのである。こうした半生の歩みの中で、三度立ちあがろうとする、その切ないばかりの願いが「雨ニモマケズ」の詩である。

四

「雨ニモマケズ」の詩は「サウイフモノニ　ワタシハナリタイ」という言葉で結ばれていることからわかるように、賢治自らのめざす理想の人間像をあふれるような思いをこめて詠んだものである。なぜこの時期に、自らの理想を思い描いたのか。それは一度、死を覚悟した者が奇しくも生き返つたという自覚ゆえである。「奇跡的にも授かつた命であり、この命は決して粗末にしてはならない、目標を定め、一日一日をゆるがせにせずに生きたい——手帳にはそうした死からの再生の思いが、深い祈りをこめた誓いや決意として記されている。例えば、その裏扉に

は「警」という文字を十回も書き記し、「貢高心」「散乱心」と書いてある。「貢高心」とは「誇り」「思いあがつた人、高ぶった人」(中村元『仏教語大辞典』。以下、仏教語の意味はすべてこれによる)であり、「散乱心」は「定心」に対する言葉で、「心が乱れて定まらないこと、凡夫の心がその対象である物に流されて一刹那もとどまらないこと」である。これらのメモは仏教の信仰に基づいて、それまでの己れをふり返り、内なる「貢高心」「散乱心」を警戒し、謙虚に、「まっすぐに」(「永訣の朝」の中で賢治は死んでゆく妹を前にして「ありがたうわたくしのけなげないもうとよ わたくしもまっすぐにすすんでいくから」と誓っている、あの「まっすぐ」である)生きようとする決意を示したものであろう。

また手帳の鉛筆さしの小紙片には「塵点の劫をし過ぎていましたこの妙のみ法にあひまつりしを」という言葉が記されている。「塵点劫」とは「はかることのできない長い時間」の意である。この言葉は、輪廻転生を繰り返してきた長い生の時間の中で、自分は奇跡的にもこのすばらしい法華経に出会ったと、法華経信仰をいただく者の深い喜びを述べたものであろう。再び命を授かった喜び、そして、法華経信仰の喜び、この二つの喜びが、これから自分がどう生きるかという決意へとつながっていく。例えば、次の言葉。(第三十七頁から四十頁)

「快樂もほしからず 名もほしからず いまはただ下賤の廢軀を法華経に捧げ奉りて 一塵をも点じ 許されては父母の下僕となりて その億千の恩にも酬へ得ん(注、「酬ひ得む」あるいは「酬ひむ」であろうか) 病苦必死のねがひこの外になし」—快樂も求めない、名声も求めない、ただ病いのこの自分の体を法華経に捧げ、その功德のごく一部でも明かにし、父母の下僕となり、その恩に報いたい。自分の命、残された生涯を法華経のために、そして両親のために捧げ、仏恩と両親に対する恩、この二つの恩を返したい、というのである。

さらにまた次のような言葉。(四十一頁から四十六頁)

「疾^{やまい}すでに治するに近し 警^{いまし}むらくは再び貴重の健康を得ん日 苟^{いやしく}も之を不徳の思想 目前の快樂 つまらぬ見
掛け 先づ——を求めて以て——せん」といふ風の自欺^{じぎ}的なる行動に 寸毫^{すんごう}も委^いするなく 厳に日課を定め 法を
先とし 父母を次とし 近縁を三とし 農村を最後の目標として只猛進せよ 利による友、快樂を同じくする友、
尽^{ことごと}く之を遠離せよ——病いの癒える日も近いと信じる中で、もし再び貴重な健康をさずかつたなら、仏法を先と
し、父母や親類縁者を次に大切にし、農村の救済に命をかけようと誓う言葉である。「先づ——を求めて以て——
せん」とは、社会主義運動風の統一的なスローガンをいったものである。賢治の社会活動はあくまで仏法の信仰
を根底におく、単独者の祈りに発するものだった。以上のような言葉は、「雨ニモマケズ」の詩を導き出す重要な
触媒でもあった。

五

以下、「雨ニモマケズ」の詩をその表現に即して、賢治の理想とする人間像を考察してみたい。（なお、この詩
は手帳の第五十一頁から第五十九頁にわたって記されている）

「風雨にさらされる」とか「雨や風にうたれて」、「雨につけ風につけ」などという言葉があるから、「雨ニモ
マケズ風ニモマケズ」などという表現は、ありふれた平凡な言葉にみえる。続く「雪ニモ夏ノ暑サニモマケヌ丈夫
ナカラダヲモチ」という言葉もこれまた、自然な何一つ奇をてらうところのない、平凡で常套的な表現にみえる。
事実その通り平凡な言葉であろう。

しかし、賢治はこれを詩として人に見せようなどという意図をもって書いたのではない。ただ眩くようにして、

心のうちに自然に湧きあがってくる感慨を、そのまま言葉にしたのである。賢治は十五歳で短歌の創作を始め、口語自由詩や文語定型詩など生涯、韻文を手放さなかったが、韻文は賢治の心の呼吸であった。詩を作ることは、自らの心に形を与えることだった。平凡な、ありふれた言葉だからといって、そこに託された思いは同じではない。その言葉の裏にはその人独自の体験があり、思いがある。この平凡で常套的ともいえる言葉にも賢治その人しかわからぬ思いと過去がこめられている。

「丈夫ナカラダ」―健康への願いの背景には、現在の自分の「熱」や「咳」、あるいは「幻想妄想」（いずれも手帳の中に見える言葉で、賢治は結核によるこうした症状に苦しんでいた）がある。自らの体を一切考えることなく、大きな理想をかかげ、農民のために奔走した賢治は、病いに倒れてはじめて健康というものの大切さを知った。「丈夫ナカラダヲモチ」たい、もう一度病いの床から立ち上がりたい、賢治はまず何よりもそのことを願った。形の上では「丈夫ナカラダヲモチ…」と以下に記される願いと並列的に記されているが、その思いとしては冒頭のこの一句は格別に重い。

賢治の健康がその農民運動（大正十五年四月―昭和三年二月）のためにそこなわれた、ということについては『疾中』詩篇の研究（『医事学研究第十四号』）で述べた。賢治自身、書簡の中で、その頃の生活について「はじめからおしまひまで病氣（こころもからだも）みたいなもので何とも済みませんでした。どうかあれらの中から捨てるべきははつきり捨て再三お考えになってとるべきはとって、あなたご自身で明るい生活の目標をおつくりになるやうねがひます」（昭和五年三月十日付、伊藤忠一宛書簡）と書いている。

実際に病気に倒れたのは昭和三年八月のことなのだが、賢治は「はじめからおしまひまで」といい、しかも「こころもからだも」という。ここには、その頃の己れをふり返る醒めた、苦い反省がある。徹底した粗衣粗食の禁欲

的生活、慣れない肉体労働、稲作指導から文化活動にまで及ぶ幅広い農民指導…理想と情熱に賭けた活動ではあったが、あまりにも自分の体を無視していた。「何とも済みませんでした」という言葉に、自分一人の情熱、思いがかえって周囲に迷惑を及ぼしたのではないかというやさしい気遣いがある。また、「捨てるべきははっきり捨て再三お考えになってとるべきはとって、あなたご自身で明るい生活の目標をおつくりになるように」という言葉は、賢治自ら、病後のあらたな生き方を模索していたことを示すものでもあろう。

「ここらもからだも」病気だったと賢治が語る時、それは己れの「虚傲」を見つめてのことだったと思われる。理想と情熱―それは「虚傲」という面ももつ。万能感に支配され、何事も可能だと思いきむ危険性は、理想と情熱の裏腹にある。同じ頃の書簡には次のようにある。

「私も農学校の四年間がいちばんやり甲斐のある時でした。但し終りのころわづかばかりの自分の才能に慢じてじつは虚傲な態度になってしまったこと悔いてももう及びません。しかもその頃はなほ私には生活の頂点でもあったのです。もう一度新しい進路を開いて幾分でもみなさんのご厚意に酬いたいとばかり考えます」(昭和五年四月四日付、沢里武治宛書簡)

病床にあつて自分の非力を知った賢治の静かな述懐である。「もう一度新しい進路を開きたい」―賢治はその「新しい進路」として昭和六年二月、東北砕石工場の技師となった。健康の回復を信じ、今度は側面から農民を援助しようとしたことだった。だが健康は回復してなどいかなかった。石灰販売のため出張中の、この年九月二十日神田八幡館で発熱、病臥の人となり、死を覚悟して、翌日遺書を書いたのである。

農民運動の挫折後、病床に臥して書かれた『疾中』詩篇(昭和三年八月から昭和五年までの三十篇の詩)。死を覚悟して遺書まで書いたが、幸いにも一命をとりとめ、帰花して病床において記された「雨ニモマケズ手帳」。

病いの苦しみの中で己れを内省し、法華経信仰を深めていくというテーマは両者に共通する。「雨ニモマケズ手帳」は、『疾中』詩篇を一層深化させた「作品」ともいえよう。

六

「一日ニ玄米四合ト味噌ト少シノ野菜ヲタベ」―健康という問題とも関連させて、賢治の理想とする食のあり方を考えてみたい。

玄米と味噌と少しの野菜―果たしてこれだけで「丈夫ナカラダ」を維持できるのだろうか。おそらく、賢治自らの痛切に願っている健康の回復と、この質素なつましい食生活の間には大きな矛盾がある。賢治は健康を願いがらも、そのためには何を食べるべきかということに意を用いなかった。その意味では現在の自分の病気と全く無関係に、理想とする生活を思い描いたのがこの一節だといえるだろう。家人が心配して様々な滋養のあるものを食べさせようとしても、「生きものの命をとるくらいなら、おれは死んだほうがいい」と断ったことや、その徹底した菜食主義が体力の回復をはばんだということが『宮澤賢治伝』（堀尾青史）には書かれている。賢治は健康を願いながらも、健康を、つまりは命を何よりも大事だとは考えていなかった。なるほど、命がなければ、（後述するような）人々を救うという使命も果たすことはできない。その意味で命は大切である。しかし、その命は、法華経に捧げた命であり、命よりも法華経が大切だった。手帳には「昼夜常精進 以求仏道故 我不愛身命 但惜無上道」（昼夜常に精進し以て仏道を求むるが故に、我身命を愛せず、ただ無上道を惜しむ）（第二十七頁）という法華経の一節も記されている。無上道―「最高の教え」のためには命を惜しまないというのである。

玄米と味噌と野菜は、健康のためというより、仏教の信仰からくる菜食主義のつましい食事をイメージ化したものと考えられる。しかし、玄米ということについては、それは米よりも栄養価に富むものとして、自らの健康のためという積極的な意味があったらしい。関徳弥宛書簡（大正十年八月十一日付）をみると、この頃、賢治は脚気に悩んでいたことがわかる。また、豚の脂とか、塩鱈の干物などを食べたために、それがきっかけとなって脚気になったと書かれている（注二）。脚気はビタミンB₁の不足によって起こる病気で、これを防ぐには胚芽を含む玄米食がよいということを知っていた賢治は、自らの健康法として玄米食を考えたのであろう。しかし、その玄米食もうまくいかなかった。森佐一宛書簡（注三）（昭和七年六月一日付）をみると、いい加減な玄米食のため、何遍も下痢をした、と書かれている。「玄米四合」は一日の摂取量としてはずいぶん多いが、それだけの労働力と副食物の少なさを考えなくてはならないだろう。

それより何より、これはそれだけ食べたいという願望であって、実際にそれほど食べたわけではない。「雨ニモマケズ」の詩は「十一月三日」の日付をもっているが、手帳の「十一月六日」の記述をみると、この頃の賢治は食事を摂るにも困難（病状からくる食欲不振であろう）であつたらしい。そのような時にどうしたのか。「疾ミテ食摂ルニ難キノ文」と題して「コレハ諸仏ノオン舍利ナレバ一粒ワガ身ニイタダカバ光明ウチニ漲リテ病カナラズ癒エナンニ癒エナバ邪念アマタナクダダ十方ノ諸菩薩ト諸仏ニ報ジマツラントサコソハオロガミマツルナリ」と賢治は書いている。「舍利」とは「仏または聖者の遺骨」を指す言葉で、アジア諸国にその遺骨を崇拜する伝統がある。ここでは目の前にある玄米を指しているのであろう。その玄米の一粒一粒を、仏が自分のためにさし出してくれた命だと観じて（感謝のうちに敬虔な心をもって）いただくなら、内に光明がみなぎり、病気も治り、邪念も消える。諸仏、諸菩薩の恩に報いたいと考えながら、拝みつつおし戴こう、というのである。賢治にとって食をとる事は一

つの観想の行ともなっていたのである。

『疾中』詩篇の中にも、枕もとに置かれたコップの水を菩薩が我がために流した苦しみの血命である、と感謝の思いをこめて見つめている詩がある（注四）。飲み、食うことは仏・菩薩の尊い御命を頂くことであり、それによって体ばかりか、心も養われる。食はつまり、体と心の薬なのだ、という信仰に立つ食事観を賢治はもっていた。

「玄米四合」以下の質素な食も、こうした深い信仰心をもって、感謝のうちに、つつましく、おし戴こうというのであって、決して何をどの位食べるかという、形だけを示したものではないと思われる。

農民運動期の生活と比較しながら、この食の問題を考えてみよう。

教え子達の証言にもあるように、その頃の賢治は、めしは三日分位を一度に炊き、梅干しをそのめしの中に入れて井戸へ吊り下げ（一種の天然クーラーである）、食事の時は、それを引き上げて汁をそそぎ、沢庵をかじりながら夕食をとる、豆腐屋で豆腐を食べてそれを昼食とする、煎餅を食事代わりにする、おかずはレタスにソースをかけたものにする、冷たい固い飯に塩をふりかけただけの食事にする……などといったぐあいに、考えられないほど徹底した粗食の生活であった。粗食というのは一般的にいえば、家が貧しく収入がないため、やむをえずそうするものである。しかし、賢治の場合、自ら選んだ粗食である。それは富裕と貧困という社会の矛盾をすべて己れ一身に引き受ける贖罪的な行為だったのではなからうか。少なくとも、そこには富裕階級に生まれた者の良心の痛みが潜在しているように感じられるのである。

「一日ニ玄米四合ト」以下の、質素な食事は、農民運動期のそれと似ているようにみえる。しかし、農民運動をしていたころの賢治の苦行にも近いような食、それを支えていた激しい情熱は、ここにはない。感謝と安らぎに満ちた静かな信仰とその日常―賢治が今願っているのはそれではなかつたらうか。

病いの床にあつて賢治は、「善い心」を「丈夫ナカラダ」以上に願ひ求めた。「欲ハナク決シテ瞋ラズイツモシヅカニワラツテキル」とそれは具体化される。

「欲ハナク」と言った時、賢治はどのような欲望を否定していたのだろうか。「雨ニモマケズ」の詩や手帳全体から（そして賢治の仏教童話からも）推察されるのは、物質的な富を求める欲望と、名声を求める欲望の二つの欲望である。物質的な富を求める欲望とは、具体的にいえば、いい物を着たい、という欲望であり、旨いものを存分に食べたいという欲望であり、立派な家に住みたい、いい暮らしをしたいという欲望である。仏教によれば、人間はこれらの欲望に支配され足ることを知らぬ愚かな存在として生きている、という。いわゆる「貪欲」であり、三毒（善根を毒とする三種の煩惱）の一つとされている。「貪欲」は、一般には「どんよく」と読まれてはいるが、仏教語で「とんよく」と読み、「自己の欲するものをむさぼり求めること。名声や利益をむさぼること」を意味する。

賢治が「欲ハナク」といった時、この「貪欲」を否定するという意味で使っていることは明らかである。

続いてすぐ賢治は「決シテ瞋ラズ」と書いている。「瞋」という文字は、これまた仏教でいう三毒の一つに「瞋恚」ということがあげられており、「自分の心に逆らうものに対して怒り、恨む」という意味である。

手帳の第五頁、六頁には「病血熱すと雖も斯の如きの悪念を仮にもなすこと勿れ、斯の如きの瞋恚先づ身を敗り人を壊り順次に増長して遂に絶するなからん それ瞋恚の来る処多くは名利の故なり」——たとい、病床にあつても瞋恚を抱くまい。瞋恚は自分と人をそこない、しだいに増して、尽きることがない。それは名利（名聞利養）の略

語で、名譽心と財欲)を求める心に基づくからである。つまり、この言葉は内なる「瞋恚」の念を捨てようとの自戒の言葉である。

農民運動をしていたころの賢治には、周囲の無理解に強い憤りを覚えることもあったようだ。それを自らの名利を求める心―人に理解され、評価されたい心の表われだとする深い内省がこの自戒のうちには潜んでいるのではなからうか。「瞋ラズ」を理想とする賢治の思いは、「生活の頂点」(農民運動をしていた頃の自分を賢治はそう表現している―昭和五年四月四日付、沢里武治宛書簡)であったころの己れの傲りをふり返る、謙虚な、静かな心があるとと思われる。

「アラユルコトヲ ジブンヲカンジョウニ入レズニ ヨクミキキシワカリソシテワスレズ」という言葉も、単に観察力とか、理解力とか記憶力といったことを指すばかりでなく、それらを内包した深い知識、知恵―仏知、神知ともいふべき完全なる知識、知恵を求める心の表現であろう。「入レズニ」という言い方に注意したい。自分を勘定に入れないでよく見る、聞くのである。自分を勘定に入れて見たり、聞いたりしたのでは真実は見えてこない。

『注文の多い料理店』の中で都会からやってきた猟師がその料理店の正体を見ぬけなかったのも、自己本位の目にくらまされたのである。これまた三毒の一つに「愚痴」ということがある。「理非の区別のつかない」愚かさをいふ仏教語である。「アラユルコトヲ」の一句はこの愚痴からの解放を求め、仏の知恵に近づきたいという賢治の理想を示したものと思われる。

自分を離れてこの世界を見ること、その見方を賢治は科学と宗教から学んだ。科学は理性の目を通して世界を客観的にみようとすることだが、宗教は心を通して、世界を支配する仏や神の知恵にたどりつこうとするものであり、我執からの解放を教え、より高い自己実現をめざし、究極の愛の理想に近づこうとするものであろう。

賢治の理想とする「善い心」は、以上のように仏教でいう煩惱の三毒——貪欲・瞋恚・愚痴から解放された、安らかな菩薩・仏の心であり、その境地に憧れ、その境地を日常の平易な言葉でイメージ化した祈りの詩が「雨ニモマケズ」である。

なおここで補足しておけば、「仏」とは、歴史的存在としてのブツダであるが、そこから転じて「すべてのいのちの根元である無量なるいのち」を意味する。一般に死ねば仏になる、などと簡単に言われるが、賢治は修行して己れをよく修めてこそ永遠のいのちたる仏にあづかることができる、と考えていた。「菩薩」とは「仏となるべく道心を起こして修行する、求道者」である。「仏」も「菩薩」も十界（迷いと悟りの全世界を十種に分けたもので地獄界から仏界まである）の中にあつて、悟りの世界に属するものだが、自らを「修羅」（十界の一。絶えず闘争を好み、地下や海底に住むという存在）として自覚していた賢治にとつて、修羅たる己れが、いかにして菩薩・仏になりうるかということは、その人生の根本的な命題であった。手帳には次のような記述も見える（第十頁、十一頁）

「三十八度九度の執拗 肺炎流感結核の諸毒 汝が身中に充つるのとき 汝が五蘊ごうんの修羅を化して或は天或は菩薩、或は仏の国土たらしめよ この事成らずば 如何いかんぞ汝能よく十界、成仏を談じ得ん」——病苦に喘ぎながら、それを修羅の苦しみとし、その苦しみを天、菩薩、仏に転ぜよ。その事によつてはじめて成仏できるのだ、と自らに向かつて呼びかけているのである。

八

健康な体、そして（すぐれた頭脳を含めた）善い心をもって、それをどう使うのか、それが次の課題である。体

も、頭も、心も、それがいかに使われるか、という目的がなければ空しい。自分は何をめざし何を行おうとするのか―賢治は病いの床にあつて深くそれを考えたようである。ここでまず「野原ノ松の林ノ蔭ノ小サナ萱ブキノ小屋ニキテ」と、自分の住む家のイメージが提出される。もちろんここには農民活動をしてきた時の宮澤家の別宅の面影がある。トシが亡くなったのもその家であり、羅須地人協会と看板を掲げて賢治が独居自炊の生活をしたのも、その家である。豊沢町にある本宅とは別に、祖父が別荘として建てたというその家は、北上川の河原続きの平地に突き出た所にあつた。それは、松林に囲まれた柵茸の家で、一階が二間、二階が一間で、ガラス窓に内は障子がめぐらされていたという。当時、一般的であつた萱ブキノ、窓ガラスなどない貧しい農家に比べ、明るく暖かい住まいであつた、ともいわれる。してみると、「小サナ萱ブキノ小屋」は、農民運動をしていた頃に賢治が暮らした家に比べ、はるかに貧しく質素な家であり、清貧に憧れる賢治の、詩的願望の生み出したイメージといふべきである。さらにいうなら、現実の賢治は今、豊沢町の、周囲の農家よりもはるかにしっかりした、立派な家で家族の世話を受けながら病床に臥しているのだから、この「萱ブキノ小屋」には、家からの出離の思いが潜んでいとも思われる。

「萱ブキノ小屋」に暮らして何をするのか。それが次の実践的課題と結びつく。

「東ニ病氣ノコドモアレバ 行ッテ看病シテヤリ 西ニツカレタ母アレバ 行ッテソノ稲ノ束ヲ負ヒ 南ニ死ニサウナ人アレバ 行ッテコハガラナクテモイトイヒ 北ニケンクワヤソシヨウガアレバ ツマラナイカラヤメロトイヒ」―東西南北に分け、病氣の人、労働で疲れている人、死にそうな人、互いに争う人に、それぞれ救いの手をさしのべたいというのである。そもそも仏教の起源は―釈尊の出家の本願は、人生の様々な苦しみから人々を救済することにあつた。即ち、釈尊がまだ太子であつた時、東西南北、四方の城門から外出しようとしたさい、そこ

で老人、病人、死者、出家者に会い、世を嫌って出家を志した、というのである。「東ニ病氣ノコドモアレバ」以下の言葉は、この「四門遊観」の故事が反映しているのではなからうか。

手帳にはまた、「唯諸苦ヲ抜クノ大医王タレ」というメモも見える。「大医王」とは、「もろもろの苦しみを救済する王」ということから、釈尊を指す言葉ともなった。このメモは、賢治が自らに向かって、人々のもろもろの苦しみを抜く大医王であれと、呼びかけた言葉であり、賢治の熱烈な宗教的使命感を表現したものである。見方によつては、「雨ニモマケズ」の詩は、この一句を敷衍したともいえるのではないだろうか。手帳にはさらにまた、生老病死の四苦、それに四苦を加えた八苦について、それぞれ「軽得」とか「除得ズ」などと記したメモも残されている（第四十七、四十八頁）。四苦とはいうまでもなく仏教という人生の四種の苦しみ、即ち一般には生れること、老いゆくこと、病にかかると、死ぬことを指している。これに愛別離苦（愛する者と別れる苦しみ）、怨憎会苦（恨み憎む者と会わなければならない苦しみ）、求不得苦（欲して求めても得られない苦しみ）、五陰盛苦（人間の身心を形成する五つの要素から生ずる苦しみ）の四つを加えたのが八苦である。これらのメモは賢治が、四苦八苦に満ちたこの人生から人々をいかにして救いうるのか、ということをやが身の課題として真剣に考えていたことを証明するものである。

人々の様々な苦しみを思い描く時、まず賢治の心に浮かんだのは、病氣に苦しむ子供の姿であった。

「東ニ病氣ノコドモアレバ行ツテ看病シテヤリ」―病氣の子供を看病したいという願いは、手帳の中にある別の詩、即ち姪のフチが熱と喘ぎに苦しんでいる様子を耳にして、自分にその病氣をうつしてほしいと祈る詩（注五）にもつながる。この詩は、身近な幼い肉親に寄せる愛情を述べたものであるが、賢治において特徴的なのは、すべての苦しむ者に対する人類愛的な愛が同じ手帳の中で同時に詠まれていることである。しかもこの時、賢治自身も

病いに苦しんでいる。その自分の苦しみをさておいて、人々の苦しみを思い、救ってやりたいと思う。医師ならぬ賢治は、ただ「看病シテヤリ」としか言えないが、そこには深い愛のほとばしりがある。

「西ニツカレタ母アレバ 行ッテソノ稲ノ束ヲ負ヒ」という表現には、農民の辛い労働を直接見てきた体験が反映している。賢治の農民運動はもちろん、稲の束を背負ってやるなどといった次元のことではなく、農村経済の建て直し、精神文化向上のためという、遠大な理想に根ざす実践であった。病気による挫折を通して賢治は、そうした気負いを棄てて、ささやかな親切を願う虚心な心をはぐくんできていったようにも思われる。

「南ニ死ニサウナ人アレバ 行ッテコハガラナクテモイイトイヒ」——平凡な表現ではあるが、容易には言えない言葉である。「死なないから大丈夫だ」と偽って慰めるのではなく、死が恐いことではないのだ、と言い得るのは、賢治が死の恐怖を乗り越えているからであろう。『なめとこ山の熊』『よだかの星』『光の素足』『銀河鉄道の夜』など賢治童話には死が受容的に描かれている作品が多い。また自らの闘病中の詩篇——『疾中』詩篇の中にも死を受容する心境の伺われる作品もある。死とは何か、死によって滅びるこの自分とは何か——賢治はそれを幾度も幾度も考え続けてきた。そうしたことの、いわば決算として、死を恐れない、という心境に到達していたからこそ、こうした言葉が出てきたのではないだろうか。

「北ニケンクワヤソショウガアレバ ツマラナイカラヤメロトイヒ」——人生の苦しみの原因として、病気や生活苦、死への恐怖と並んで、不和や争いがある。なぜ人々の不和・争いが起こるのか。その原因を賢治は仏教徒らしく「瞋り」の心にあると考えた。名利を求めると利己的な欲望、それが瞋りを生じて、不和・争いを引き起こす。「ツマラナイカラヤメロ」という言葉には、人間のそうした愚かさをはるかの高みから見つめる覚者のまなざしが感じられる。『ひのきとひなげし』や『どんぐりと山猫』にも伺われるように賢治は、そのような「超越的な視点」を

若くしてもっていた。しかし、死をくぐり抜ける中で、いつそう深く、静かに、人間を見つめる知恵を授かったようにみえる。この一節には、世を越えた超越的な心境の静寂があるといつては言いすぎであろうか。

九

賢治の願う人間像として最後に記されているのが「ヒドリノトキハナミダヲナガシ サムサノナツハオロオロアルキ ミンナニデクノボートヨバレ ホメラレモセズ クニモサレズ」(注六)とあるように、非力な愚か者であり、皆にも「デクノボー」と侮られているような人間である。それにしても、賢治は文字通り、こういう人間を理想としたのであろうか。

賢治自身、日照りの時にただ「ナミダヲナガシ」、寒さの夏は「オロオロ」歩いてなどいかなかった。それどころか、自分のもてる知識や技術、体力の限りを尽して一文の報酬も受け取らず農民のために奔走したことについては数多くの証言もある。また、農民運動時代の賢治の詩をみても、ひたすらに農民のことを考え全力を尽くすような生き方をしていたことがわかる。そうした賢治がここで、愚者のような生き方に憧れ、人々の嘲笑さえ買いたいと願っている。

これは文字通り、愚者たらんとし、嘲笑を買おうなどとしているのではなく、自分というものの完全な放棄、徹底した謙虚な心の表われとみるべきであろう。賢治は己れの中にあるわずかな慢心、自惚れ、名誉心を棄てようとしている。徹底した無私に生きようとする願いが、自虐的なまでのこうした表現を生んだのではないだろうか。それは菩薩の理想の姿でもあった。

しばしば指摘されるように、この一節には「常不輕菩薩」のイメージが投影していることはまちがいないと思われる。法華經によれば、この菩薩は四衆を見るたびに礼拝して「われ敢えて汝らを輕しめず、汝らは皆当に仏と作るべき故なり」と唱え、たとい相手から木で叩かれ、石を投げつけられてもこの言葉を繰り返した、そこから常不輕菩薩と名づけられたという。日蓮も自分の受難を不輕菩薩のそれと重ねて末法の世にあって法華經を広める困難に耐えたという。法華經の精神を伝えることを生涯の使命としていた賢治は、日蓮にならって、自ら常不輕菩薩たらんとしていたに違いない。

賢治の文語詩に「不輕菩薩」と題する詩もある。

あらめの衣身にまとひ

城より城をへめぐりつ

上慢四衆の人ごとに

菩薩は礼をなしたまふ

(われは不輕ぞかれは慢

こは無明なりしかもあれ

いましも展く法性と

菩薩は礼をなし給ふ)

われ汝等を尊敬す

敢て輕賤なざざるは

汝等作仏せん故と

菩薩は礼をなし給ふ

(ここにわれなくかれもなし)

ただ一乗の法界ぞ

法界をこそ拝すれと

菩薩は礼をなし給ふ)

「デクノボー」とはこの常不輕菩薩を母胎として、その仏教的臭み、倫理的な押しつけがましさを取り去って、ただ一介の愚かもののごとき存在でありたいというところから生まれたイメージであろう。大聖は大愚に通ずるのもいう。聖なるもの(仏・菩薩)をめざして修羅たる己れを超越して生きようとした賢治が、その末期の病床において大愚を理想とした、その心の深さを改めて思わずにいられない。

十

私は賢治の「雨ニモマケズ」の詩に現代の仏教が忘れて重要な教えがあると考える。その第一は、仏教は「慈悲の宗教」といいながら、社会的な関心が薄く、貧しい人、病める人を積極的に救済しようという活動があまりみられなかったことである。これは特にキリスト教との対比においてきわ立っている現象であるが、キリスト教がマザーテレサやシユバイツァー、ダミアン神父、コルベ神父などその隣人愛の行為によって宗派を超えた感銘を多くの人に与えているのに対し、仏教の場合、そうした博愛的な行為によって人々の心を捉えている「聖人」がきわめて少ない。禅は自分一人の悟りを説き、浄土教は来世における己れの幸福を願う。しかし、いずれも自分一人の救

いに傾きがちであつて、現実に苦しんでいる者に広く手を差し伸べようとする姿勢に弱かった。賢治の信仰は、そうした社会性の欠如しがちであつた仏教信仰への反省をうながすものといふべきだろう。

第二に、生命の永遠性に対する深い確信である。死にそんな人に対して、こわがらなくてもいいと言ひえた賢治は、明らかに死後の命、来世を信じていた。その作品「手紙一」の中に、自分の体を他の虫たちのためにさし出して死んだ龍は天上に生まれ、お釈迦様になつて、皆に一番の幸せを与えた、という話もある。その末尾に「このはなしはおとぎばなしではありません」と書き記しているように、来世への信仰は子供だましのめでたい話ではなく、疑いえない真実だと信じていた。来世への信仰を笑うべき愚かなことと考えたり、宗教的な無関心が支配的で、「すべての信仰や徳性はただ誤解から生じたときへ見えしかも科学はいまだ暗く、われらに自殺と自棄のみをしか保証せぬ」(生徒諸君に寄せる「断章八」という時代の風潮の中で、孤立無援に自らの信仰を守り、それに基づいて生きようとした。その根底にあるのはこの世を越えた永遠の命に対するゆるぎのない信念であつた。この生命の不滅性、これこそ現代の仏教者が自信をもつて説くことを忘れているものの一つではなからうか。

(注一) 大正八年一月二十七日付、父宛書簡によると、妹の病状、金銭の支出等を報告した後で次の様に書いてる。

「終りに一事御願申し上げ候。それは何卒私をこの儘当地に於て職業に従事する様御許可願ひ度事に御座候。色々鉦物合
成の事を調べ候処殆んど工場と云ふものなく実験室といふ大さにて仕事には充分なる事、設備は電気炉一箇位のものにて
別段の資本を要せぬこと、東京には場所は元より場末にても間口一間半位の寶石の小店沢山ありていづれにせよ商売の立
たぬ事はなきこと、この度帰宅すればとても億劫になり考へてばかり居て仕事の出来ぬ事、いつまで考へても同じなる事、
この仕事を始めるには只今が最好期なること(経済の順況、外国品の競争少き為)、宅へ歸りて只店番をしているのは余
りになさげなきこと、東京のくらし易く花巻等に比して少しもあたりへ心遣ひのなきこと、当地ならば假令失敗しても無

資本にて色々に試み得ること、その他一一列挙する迄も御座無く候。地方は人情朴实なり等大偽にして当地には人のよき者沢山に御座候」

賢治はこの時、東京で宝石の研磨業、人造宝石を合成することなどを考えていた。一月三十一日付の書簡をみると、父は一応、賢治の話に耳を傾けたようであるが、三月三日妹のイチ、ヤスと共にトシに付き添って帰花しており、四月以降東京での自立の道は開けず、自ら「余りになさげなき」と記すような古着屋の店番をしている。

(注二) 大正十年八月十一日付、関徳弥宛書簡に「脚気のお薬を沢山お送り下さいまして重々のお思召厚くお礼申し上げます」という一節があり、それに続いて以下のような記述がある。

「七月の始め頃から二十五日頃へかけて一寸肉食をしたのです。それは第一は私の感情があまり冬のやうな具合になってしまつて燃えるやうな生理的の衝動なんか感じないやうに思はれたので、こんな事では一人の心をも理解し兼ねると思つて断然幾片かの豚の脂、塩鱈の干物などを食べた為にそれをきつかけにして脚が悪くなったのでした。然るに肉食をしたつて別段感情が変わるわけでもありません。今はもうすっかり逆戻りをしました」

感情の高揚、生理的な衝動を高めるため肉食をしたが、何の効果もなくかえつて脚気になっただけだという。この書簡には「文壇といふ、脚気みたいなものから超越してしっかり如来を表現して下さい」と同じ法華経を信じる関を激励している。脚気は一種の贅沢病としてこの中では捉えられているようである。

(注三) 昭和七年六月一日付、森佐一宛書簡の末尾に次のようにある。

「いままで三年玄米食（七分搗）をうちぢゅうやりました。母のさとかから宣伝されたので、私はそれがじつにつらく何べんも下痢しましたが去年の秋までそれがいい加減の玄米食によることを気付きませんでした。気付いてももう寝てゐて食物のことなどかれこれ云へない仕儀です」

(注四) 『疾中』詩篇の一つに次の詩がある。

「そのうす青き玻璃の器に　しづかにひかりて澱めるは　まことや菩薩わがために　血もてつぐなひあがなひし　水とよばるるそれにこそ」

(注五) 手帳の中に次の詩がある。

「この夜半おどろきさめ　耳をすまして西の階下を聴けば　ああまたあの児が咳しては泣き　また咳しては泣いて居ります　その母のしづかに教へなだめる声は　合間合間に絶えずきこえます（中略）　ああ大梵天王　こよひはしたなくも」

こころみだれてあなたに訴へ 奉ります あの子は三つでございますが 直立して合掌し 法華の主題も唱へました 如何なる前世の非にもあれ ただかの病かの痛苦をば私にうつし賜はらんことを」

(注六) 手帳には「ヒ・デ・リ」ではなく明らかに「ヒ・ド・リ」と表記されている。このことについては『宮澤賢治語彙辞典』の「早魃」の項に詳しく記されているように「ヒ・デ・リ」の誤記とみられる。

(本稿は第三十二回私立医科大学同窓会連絡会東部会、第三十五回岩手腎不全研究会、圭陵会静岡支部等における講演をもとに、話しきれなかったことも補いながらまとめたものである。)